審査の結果の要旨

氏名　王 林鋒

検定教科書の作成過程は、国の学習指導要領の目標に準拠し学習内容が具体化されていく過程である。本論文は、日本と中国の「英語検定教科書」分析を通じて、外国語としての英語教科書の特性や共通課題を見出すことを目的とする。全 3 部 7 章から構成される。

第Ⅰ部第 1 章では、教科書研究の重要性と英語教科書研究の動向を検討し、採択権限等から教科書制度を類型化し、日中は国の学習指導要領に従う検定教科書制度の下で県教育委員会が教科書を採択する共通のパターンであり、歴史的に輸入英語教科書が優位であった時期から、自国の文脈に合う独自の教科書開発時期を経て、英語教科書の改善が求められ発展してきた共通性とその中での相違を指摘している。第 2 章では、学習単元分析の枠組みとして、学習に関わる情報、本文内容、練習活動の 3 要素に分けることが説明される。

第Ⅱ部第 3 章では、学習内容以外の部分を対象に、教育的機能をもたらすメタディスコース分析を用いて、態度的なメタディスコースの不足と母語使用における共通の課題を明らかにし、日本は学習内容の文脈を解説することに重きを置き、第 1 人称で、母語で指示するなど学習者への情動的支援を特徴とするのに対し、中国は、学習目標を明確にし、第 2 人称で、英語で指示するなど学習者の動機づけ向上への意図を特徴とすることを示している。第 4 章では、単元の「本文内容」を対象に、全体構造の中で各パーツ間の関係性を修辞パターン分析により検討し、両国においてパーツ間の関連性が最も薄い「羅列パターン」の使用が半分以上を占めることを示している。続く第 5 章では、「練習活動」を、1) 学習者の主体性、2) 言語的重点、3) 知的操作、4) 学習者同士の相互作用、5)インプット・アウトプットの内容・形式の 5 視点から分析し、日本は「聴く」「見る」のように回答を求めない受動的練習問題が 4 割を占めること、中国は言語システムに焦点を当てた活動が日本より多いこと、両国とも練習課題では「意味解読」、「情報選択」が高い割合を占め、ことばの力に関わる言語形式や規則を分析・比較・仮説検証・応用するメタ認知的な操作の割合は非常に少ないことなどを明らかにしている。

第Ⅲ部第 6 章では、上記 3 つの研究結果をふまえ、教科書が学習者に身につけさせようとする資質・能力と学習指導要領の方針との関連を検討し、中学 1 年生段階では四技能をバランスよく育成するという学習指導要領の総目標は達成していないという外国語学習入門期の特性を明らかにしている。第 7 章では、これらの結果を踏まえ、本論文の意義と示唆を示し、今後の課題として教科書と授業実践との関係の検討の必要性等を示している。

本論文は、外国語としての英語教科書の日中の特性を新たな分析方法で示した点で独自性が高く、教科書研究の可能性を拓く研究であり、教育実践にも寄与すると評価できる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに十分にふさわしい水準にあると判断された。